

---

## ディスカッション

(永田)

はい、それでは、時間になりましたのでディスカッションを始めたいと思います。

すでにいくつか質問とか感想がきております。

当初、柴崎さんの講演に対する感想と、それから質問が一つ、簡単な質問がきてました。「図書館の跡地は現在どうなってますか？」って質問がきてますけど、この辺りで簡単にお答えいただいて、議題の中身に入ってゆきたいと思いますが、いかがでしょうか、柴崎さん。

(柴崎)

どんぐり子ども図書室、どんぐり・アンみんなの図書室、あれはいま現在は名取市の歴史民俗資料館として生まれ変わって使われております。

(永田)

ありがとうございました。

それから同じく、名取市さんへということで支援関係ですかね、「石狩市それから、石狩市と関係する沖縄の恩納村さん、さらに輪島市さんだとか、そんなネットワークがあるようです。そういったもの（つながり）を感じ取った」という、コメントがついてました。

次に、感想と若干質問の部分があるものでありますが、これはやっぱり名取市の柴崎さんに向けたものかと思いますが、「被災地の子どもたちの心の回復というところに関心があります。大川小学校の遺族会の活動についてこの半年、佐藤敏郎さんを通じて、これは心の素地、心の素地を育てるにはコミュニティの力がとても必要なんだなと感じています。図書館がそのようなコミュニティの核になってゆくのはすばらしいなと思います。一方で、震災後に生まれた子どもたちがすでに小学生になっています。そうした思いをどう伝えてゆこうとしているのか、ここがお伺いできればと思います」というのがきておりますが、柴崎さんコメントをいただけますか。

(柴崎)

はい。私たちも、子どもたちの心の回復についてはすごく大事に考えていました。震災直後、一番に大切にしないといけないサービス対象は子どもたちだと思っていました。もちろん大人も大事なんですけど、まず最初に取りかかりたかったのは、子どもたちへのサービスでした。先ほどの話のなかにはありませんでしたが、日図協（日本図書館協会）からの支援で、北海道から使わなくなったBMをもらいまして、それに子どもたち用の本を入れて、子どもたちに楽しんでもらったということがありました。その後、支援で建物を建てるという話が出たときに、子どもたちが安心して本を読める場所をつくりたい、まずは子どものサービスから始めたいということで、子どもの図書室をつくりたいという私たちの気持ちと、ユニセフの支援をしたいという気持ちがうまくマッチングして、子ども図書室ができあがったのです。そのようなわけで、子どもに対する支援というものはとても重要だと思って取り組んできました。

震災から間もなく10年になるわけですが、そのとき生まれた子どもたちはもう小学生になりました。震災の記憶がない子どもたちに、震災のことをうまく伝えてゆかなくてはいけない

と。図書館がすべてできるわけではありませんが、図書館もそのお手伝いができるというような立ち位置にいたいので、いま、そのような思いをもって子どもたちへのサービスに取り組んでいます。そんなところでよろしいでしょうか。

(永田)

ありがとうございました。私が先ほどちょっと資料にはさんだ、ゾッリ、ヒリーによるヒントですと、個人のレジリエンスという問題を考えるときに、自己回復力とか、自己統率力ということがいわれるんですが、子どもたちの場合は、そういったものが未発達の段階ですし、またそれを養ってゆくっていうのが、難しいと思いますが、図書館がそういう場所になってゆくことが大変大切だなと私は感じます。その意味で図書館はレジリエンスを育てる場所かなと思います。

次に鳥取県立図書館に参ります。

質問が飛び込んだ順序で、いまのところやっています。以前のシンポジウムのように、ある程度の質問が揃ってそれを分類してということじゃなくて、チャットに入力された順にやっております。

「鳥取県立図書館のサービスにとっても注目しています。病気と向き合うための情報発信、とても心強く思います。重い病気を抱える家族の看護をしているとき、そうした情報は、藁もつかむ思いで、どれだけ心強いでしょうか。お話を伺って、とても心を動かされました。ありがとうございました」とおっしゃってます、これは質問というよりも感想ですね。

「鳥取県立図書館さんへ」ということで、「レファレンスの、特にビジネス支援サービスのときに感じられたのですが、このコロナ禍になり、いろいろサービスを調整せざるを得なくなって、大変かとお察しします。この手のビジネス系レファレンスには、たとえ回数を分けたとしても、1回当たりにかかる時間が非常に長くなってしまいそうですが、鳥取県さんは現在どのような工夫をして乗り切っておられますか。ちなみに当館では、建前上、対面のレファレンスサービスは15分以内、データベースとインターネットは1時間以内、新聞、マイクロフィルムは2時間以内といった制限を設けさせていただいております」、いかがでしょうか三田さん。

(三田)

はい、ご質問いただきましてありがとうございます。確かにいま、コロナ禍で当館でも、レファレンスについても時間の制限、ある程度そうです、長くならないというようなところで、ご理解をいただいて使っていただいているところです。

以前からやはりそうなんです、やはりレファレンス、ビジネスに関係するレファレンスは、割と長くなったり、すぐにその場では解決ができなかったりということがあります。でも、そういったときには、お話を聞いて、そのときにお出しできる情報はみていただくということをしますが、それ以降については、後日、調査の上、ご連絡をさせていただいています。

(永田)

よろしいですか。お二方にご質問等なさった方は、以上のような回答になにかコメントございますか、もしあったら手を挙げていただくとありがたいのですが。

なければ、次のご質問です。柴崎館長へのご質問として、「早朝の一部開館を始めたのはどういう理由からでしょうか。やすらぎ、つどい、ひろがるということで、つながるということで

しょうか。図書館は日常を伝えているというレジリエンスというような意味なんでしょうかというふうに理解しました」。ちょっと、漠とはしてますけども、ともあれ「一部開館を始めたのはなんのためですか」ということで。

(柴崎)

はい、お答えします。これは単純に、名取駅前に建ったからっていうのが正直なところで。そもそもこの一部7時半を、図書館の方で「したい」と言い出したわけではなくて、実は当時の市長の考え方でした。「駅前に移るんだったら、名取駅は県内でも3番目に乗降者が多い駅だから、朝から図書館サービスできるように7時半から開けなさい」といわれたのが本当のところ。ただ、それには私も同じような考えだったのでやらせてもらいました。

(永田)

そのような形で人々が寄ってくださるっていうのが結果として、図書館にとってはコミュニティを支える活動になってるかと思います。

質問は、ただいまのところ以上です。いつもとかなり違って、質問を出される方が少ないんです。

柴崎さんのほうのお話のなかで、復興を支えたものっていうか、復興の後、それを後押ししたものをおっしゃってましたね。一つは、柔軟で楽観的に考えられたっていうのがあったこと、もう一つは、新たなコミュニティのつながり、それは本当にさまざまな形で出てきてコミュニティの形成というか、支え、そして実際に成し得た喜びが、今回後押ししてくれたとおっしゃってました。大震災という不幸があってコミュニティがもっと密になったと思うんですが、図書館の側からどんな働きかけをするようになったか。そのあたりを教えていただくと嬉しいんですが。何回も会合をやろうとしたのは、新しい図書館をつくって、間もなく開館するために集まりを仕立てたということですか。

(柴崎)

はい、そうです。紹介したワークショップは、新しい図書館の開館に向けて開催したワークショップです。

(永田)

ところが、その開館を紹介しにいったところで、いろいろ新しい事実に出会い、それからそこに新しいことや人とのつながりができたということなんでしょうか。

(柴崎)

はい、そのとおりです。いろんな形のワークショップを、開催してゆくうちに、図書館のもっている課題がいろいろみつかりました。それを解決しながら新しい図書館の建設に結びつけました。

(永田)

鳥取県立図書館でも打って出るというか、情報を、図書館はこういうことをやっているんだよという形で、情報を発信することを強くおっしゃってましたね。その点では名取市図書館も同じような姿勢をとっているような感じを受けます。

また三田さんのところは、情報発信するだけじゃなくて、いろんなサービスを充実させて、成果を次につなげてゆくとかなさってます。そしていうならば分厚いサービスをなさってるか

らつながってると思います。しかし、個々の図書館では、なかなか情報発信してもレスポンスがつかめないとか、いろんな悩みがあると思うんです。そのあたりは実際に動いちゃったほうがいいようで、名取市さんの場合も、そういう会合をやったことによって、なにかが出てきますよね。特に、そのあたりさらに言葉を添えたほうがよいことはございませんか。

(三田)

サービスの充実のあたりも触れていただいて、ありがとうございます。私たちがやってきた姿勢というのは、私の前に事例を発表いただいた、名取市の柴崎さんからのお話にも、ああやっぱり同じなんだなと思うところがありました。とにかくやってみるっていう話があったと思うんですが、やってみて失敗したらやめるっていうね。考えて考えてやらないよりは、やっちゃおうよっていうのが平成16年ぐらいからのずっと動きでした。それを特に恐れてはなかったもので、次々と結果としてなんとなくいろんなサービスができてきたようにみえたっていうのは、そこはあるかもしれませんが。それを始めるときに思っていたのも、たしかにレスポンスっていうことはあるんですけども、確かにそこはつかみたいところなんですけど、一つ、いろんなサービスをしてゆく上での、広げてゆきたい、もっと知ってもらいたいっていうときに、一般の方々にどれだけ、どこにいったん何をいけば広がるんだろうかっていうのは、やはりみえないところもあって、要するに、対象が大きすぎるので、どうしたらいいんだろうっていうのもありました。そういうときに、それだったら、例えばビジネス支援であれば、商工会議所とかそういった団体に、しっかり、わかっていたら図書館が割と使えるぞって、言ってもらおうことのほうが、もしかしたら広がるんじゃないかなっていうようなこともあって、連携というところが生まれてきた。それを他のサービスでもやはりそうで、看護協会のほうに、看護師さん向けの情報収集の研修会っていうようなところに講師に呼んでいただいたりして、そこで図書館とこういうことができますし、皆さんでもこういう情報収集できるんですよってお伝えするほうが、ピンポイントに広まってゆくっていうことも経験しながら、いまの形のサービスをやっているという感じですね。ちょっと言葉足らずですが、そのように思っています。

県立図書館でそういったサービスを展開する意味というのは、モデルをつくることだと思ってまして、県内の図書館に、こういうサービスでこういうやり方すればできるなら、うちでもやってみようかなって思ってもらえるモデルを示してゆくことですので、常に挑戦してきたというのがいままでの流れだと思っています。ちょっと補足になってないかもしれませんが、私からは以上です。

(永田)

鳥取のケースをみると、見える化が上手だなと思いますね。「なんとか大賞」とか、あるいは、実際にサービス効果が出たところ見える化してるような気がしますね。そのへんが理解され、図書館を皆さんが支えてくれるのかな、と思うんです。

あと名取市の場合も、実際に図書館行ってみますと、皆さんがずいぶんくつろいで、そして図書館をうまく使ってるという様子を拝見し、市民の方に親しまれてる図書館だなと受け止めました。見える化を実際の運営で、さまざまなさってると思います。

いま、見える化といえばですね、インターネットでわりと図書館も配信してるじゃないですか。それと同時に、鳥取県立では館内の各コーナーで、こういったものがあるよってリアルに

もみせている。そういう、二重三重に見える化してるっていうところが気づいたんですが、そのへんはどういうお考えで、どうしてそんなふうになさってるんでしょうか。県立図書館ですから住民の方が、県全体の方が県立図書館に足を運ぶってことはできないと思うんですが。

(三田)

そうですね、先ほどご紹介させていただいたなかでも、コーナーの写真をみていただいたと思います。県立図書館に来館している方は、まずは自分が興味がある本は自分で探されるんですが、来館している方であっても、その際にこんな本や写真があるってなかなか気づかれなかったりします。で、コーナーをつくるっていうのは、一つそういう意味では、非常に見える化という意味で、説得力のあるというか、私たちが届けたいメッセージは届くようにというのがあって、コーナーをまずつくっています。

それに伴ってレファレンスが少し変わってきたとか、問い合わせが増えたみたいな話もしましたが、やっぱりそれがなければ、なかったのかなと思います。コーナーより少し規模を小さく考えてみると、図書館は日常的にいろんな小さな展示をしますよね。展示をすることによって、いままで「あれ？まったく動かなかったのに！」っていうような本が貸し出しに出ていたりするわけです。やはりそういうふうに見せてゆくっていうことは、図書館のなかをコーディネートしてゆくというか、発信の場として考えるというのは必要かなと思っています。

また、いまそうですね、コロナ禍ということもあって、インターネットを使うっていうこともたくさん出てくるんですが、またそこは少し、メッセージがもしかしたら違うのかもしれない。ただ、むしろこの来館されない方には、やっぱりインターネットをしっかりと使って情報発信してゆくっていうことは必要だと思いますので、そちらについても、両方やってゆかなくてはいけない、というふうに思っているところです。インターネットについてはちょっとまだ足りてないのかなと、私自身思うところも、細やかにしてないのかなと思うところありますけれども、やはり両方が必要だと思っています。

(永田)

はい。コロナ禍で、どの図書館もやはりそのデジタルな情報をいかに出してゆくかが課題だということがみえてきちゃったんですが、名取市立図書館としては、カバーする地域はそんなに広くはありませんけれども、柴崎さんのところでも、インターネットで、図書館の情報を出す、あるいは図書館のサービスを出すことはなさってるんですか。

(柴崎)

インターネットを使って図書館の情報を発するというはやっております。コロナ禍になってからも、現在はやっておりませんが、今年の春先には子どもたち向けに読み聞かせみたいなことをやっていました。おはなし会が、図書館のなかでできなかったとき、図書館に来館してもらおうことができなかったときに、限定的にやったことはあります。

(永田)

そうです、名取市さんは、コロナ禍で早い段階でおはなし会をなさったということ、積極的にそういったサービスを展開されているというのを承ってございました。

それで少し、フロアっていうか、ネットにつながってる方々のご発言も促したほうがいいかなと思います。名取市の柴崎さんが新しいつながり、コミュニティができて、その友の会をつ

くったということをお話しになってました。友の会というと、ご参加の図書館パートナーズの小田垣さんが思い浮びますが、小田垣さんのほうで、なにかご意見とかご発言ございませんか。いらっしゃるかな？

(小田垣)

小田垣です。友の会ですね。関連する私の活動なんですけど、いわゆる友の会というのは、ちょっと性格が違うかと思うんですが。やっぱり市民っていうか、そういう方が中心となって、あの活動するってのはやっぱり、地域活動をもとにした考え方なので、図書館のなかではなく、外からの働きかけっていうのが大事になるかと思うんですけど。なので、あまり図書館という枠にとらわれなくてその、外の地域活動そのものを、図書館のほうに取り込むという発想というか、そういうことがなにか一つ、大事になってくるのかなと思いますね。なんていうかこう、図書館のカウンターのなかで発想すると、やっぱりその図書館のなかに閉じてしまうという感じが、はい。

(永田)

それは友の会であろうが、パートナーズのような形の会合であろうが、どちらも大切だという意味ですよ。

(小田垣)

そうです、そうです。はい、そう感じています。

(永田)

柴崎さんところの友の会は、その図書館を支える会合という形で設定されているわけですか。その趣旨のほうを少し、もう少しご説明いただくとありがたいですが。

あの、いまご発言いただいたのは、東京墨田区の図書館パートナーズの小田垣さんのご発言なんですけど、小田垣さんところは、図書館の活動を外から温かくみて、そしてそれをサポートするような形なんですね。図書館活動そのものをサポートするという、もっと広い意味でのサポートになっていますね。

名取市の友の会はいかがでしょう。

(柴崎)

はい、うちの友の会は、「図書館を支え、援けるための活動」、それから「図書館を楽しむための活動」、このようなことを目的にしています。その「支え、援けるための活動」のなかに、友の会でボランティアをするというのがあります。が、友の会に入っているからといって、必ずしもボランティア活動をしなくてはいけないというわけでもありません。図書館を「頑張れ」って応援したい気持ちがある方であれば、誰でも会員になれるし、「図書館でこういう楽しいことをやりたいね」って企画をもってこれるのも、会員さんの一つの楽しみじゃないかなと思っています。一緒にやっているって感じですかね。

(永田)

小田垣さんのところと違和感のないものじゃないですか。

(小田垣)

そうですね、同じだと思います。楽しむと、図書館を楽しむために集まって、好きなことをしたい人がいれば、そこで好きなことをするっていうのが基本的に、コミュニティが生まれる

最初の考え方だと思いますね。同じだと思います、はい。

(永田)

小田垣さんのところのパートナーズなんかも、結局は、地域が強くなるっていうか、地域の自立っていうか、そういったものが欲しいというところが、根っこにあるような気がするんですけど。それは今回のテーマ、レジリエンスみたいなのところに、かなり近いのかなと思います。

(小田垣)

はい、そうですね。図書館をサポートするっていうのも、図書館を活性化するのは目的ではなくて、その地域を活性化するのが目的であって、そのための図書館というスペースであったり、資料であったりっていうことを、なにか考え方ですね。

(永田)

そうですね。もちろん図書館がうまく運営されてるっていうことは大切なんですけど、図書館は地域のためにあるわけで、図書館のためにあるわけではないですから。わかりきったことですけども。

そういう話になってきますと、太田さんがいらっしゃいますから、太田さんにそのあたりの、なにかおっしゃりたいことがあるんじゃないかと思います。太田さん、いかがでしょうか。

(太田)

ありがとうございます。われわれ、昨年从这个レジリエンスっていう言葉に注目して、活動のテーマとして、ずっとレジリエンスということをしていい続けてきました。こういう毎年出している「綴」という冊子も、2020年2月発行のものに「図書館と地域のレジリエンス」というタイトルをつけました。その後コロナがきて、ますますレジリエンスについて考えさせられるということで、今日永田先生もレジリエンスっていう言葉に注目されてこういう、シンポジウムもなさって、名取市さんと鳥取県さんの事例を聞かせていただいて、すごく勉強になりました。ああ、やっぱりレジリエンスが大事なキーワードになってきたなという気がしました。

ここ1週間、先週から今週にかけてレジリエンスを考える上ですごく大きなトピックが二つあったと思うんですね、図書館の世界で。一つは河野大臣が高知のオーテピアを見に行くと。僕はものすごく危ないなと思ったんですけどね。行政改革っていう旗印のもとに、県立と市立の合築って、ものすごくいろんな要素を含んでいて難しい話だと思うんですけど。あの大臣ですから(笑)、ものすごく単純化して、行政改革っていう旗印のもとに捉えられてしまうと全国的な図書館がものすごく被害にあうっていうか、危ない目にあうんじゃないのかなと思っていて。実際図書館って、何年か前の、いわゆる事業仕分けでものすごい波を被って、指定管理にもピンからキリまであるので一概にはいえませんが、指定管理という波が押し寄せてきたわけで。同じような、また、合築だけじゃない、今日お話伺った鳥取県立さんみたいなことをいろいろ頑張っていれば、単純なそんな話はないと思いますが、県立図書館と県庁所在地の図書館の二重行政問題みたいなものって必ず出てくる話で、そういうときにそれぞれの図書館の役割をきちんと、レジリエンスという視点のもとで整理しないと、目先の行政改革っていう波にやられてしまうなど。

もう一つは、西日本新聞だったかな、常滑で前に決まっていた話なんだけれども、新聞の記者さんが書いたことによってもう一回議論が沸騰していて、常滑市さんが中央図書館を潰してしまうと。何年か後に議論を始めるみたいなこともいってるみたいですけども。いま、私が全国のいろんな自治体や図書館から相談を受けていると、いくつかの市町村の首長さんが、常滑の例を引き合いに出して、図書館に急ブレーキを踏むようなことをおっしゃったりとか始まっているんですね。常滑の例なんてまさにレジリエンスの問題で、名取市さんの場合は震災ということで物理的に図書館を失って、そのなかで皆さんが頑張っていて復興されて、まさにその過程で地域のレジリエンスが発揮されたのですよね。今日本の図書館の多くは、物理的にではなくて、もう図書館そのものが行政からみてはお荷物でしかない。ただ物理的にやられてしまうんじゃないかと、もう自治体からみて、見限られてしまうっていう状況が目についてきています。今回の行政改革で旗振っている大臣の動向と、この常滑で起こった首長さんの判断みたいな事例が、この後どう響いてくるのかと考えたときに、まさに図書館自身が本気で考えておかないといけない。名取市さんのように逆に復興のプロセスでレジリエンスな力を発揮していったのだけど、そのいま名取市さんがなしえているような状態を各地の図書館がつくれているのかどうか。そういうレジリエンスが発揮できない図書館っていうのは、このコロナ禍で酷いことになってたりしますから、この後も、自治体の予算はますます厳しくなるなかで、一気に図書館が消滅していく状況もあるんじゃないのかなって危惧しております。ただその意味でも、それぞれの図書館が今日お話を伺ったような、いろんな方法を使って地域の住民とのネットワークをつくっていかないと、おそらくいま、多くの図書館が長年の間やってきた、住民サービスの延長の図書館では、自治体や住民、首長さんには響かないと思うんですね。この先地域の未来に対して、それぞれの図書館がどこまでコミットできるのか。今日、さかんに課題解決という話が出てきましたが、課題解決もそうだし、地域の未来像をどうやってみんなで作っていく拠点に図書館がなれるかどうか、そういうふうにコミットできてないと、おそらく、この後ものすごい逆風が吹いて、物理的ではない自治体のいろんな状況のなかで、図書館が消えてゆくという事態もあり得るんだと、すごく危機感をもって見ています。

今日のシンポジウムでお聞きしたような事例というのは、どんどん地域の図書館さんも共有して、生き残ってゆけるような、物理的な災害ではない、人的なものにも負けないで、きちっと将来に残ってゆくような図書館になってほしいなと、すごくいま思っているところです。

(永田)

ありがとうございました。大変重要な指摘だと思います。昨今のさまざまな事象に関する議論をみていると、どうも本質的なところがきちっと語られてない。コロナに対応する議論なんかもそうなんですが。テレビのバラエティショーですか、トピックをとればいいというような形で。インターネットの情報もそうですね。

サステナビリティに関してはSDGsが出てですね、さすがに皆おかしいことというのは少なくなりました。少なくなりましたが、誤解もある。レジリエンスという言葉に関して、政府の翻訳は「強靱化」という訳で、ちょっと違うなという感じもあります。われわれ生きてゆく上できちんと危険を避けて、混乱が来たときにそれに対応できるよう、自然環境に備わる力を

含め、弾力的な復元力を準備しておくというような意味合いでのレジリエンスとはすこしずれます。おっしゃるとおり、行政改革というようなところから、「合理的だ」「効率的だ」というところで、図書館が押し切られてしまうような危機感は、あるかと思いますね。

なんかこの、いまの太田さんのご意見について、つながってる方、ご意見ございますか？遠慮なくどうぞ。

(太田)

さっき名取市さんの発表のなかであったのかな、「自立」っていうのは依存先を増やすことだっていう。

(永田)

鳥取県立のね、最初ね。

(太田)

それに尽きると思うんですよね。

(永田)

そうそう。

(太田)

ワンウェイの住民サービスではなくて、もうもはや住人と双方向で、お互いの依存関係を何重にもつくってゆかないとレジリエンスって発揮できないと思うんで。だから、やっぱり、Win-Win の関係、それは住民と図書館もそうだし、利用者と図書館もそうだし、逆にいうと、行政と、だから市役所とか役場と図書館の関係もそうだと思うんですね。いま一番問題なのは市役所、役場と図書館が Win-Win の関係がちゃんとできてない。単に予算が落ちてくるのを待ってるだけだと一方向になってしまうので。だからそうではない。市役所の職員にとっても、図書館が大事であるという Win-Win の関係をどうやってつくってゆくのか、相互依存の関係をどうやってつくってゆくのかっていうのがすごく大事なのかなと思います。

(永田)

人間関係でもそうですよ。友人だとか、その自分の周りを、なんとなく一人ぼっちになってしまうことは非常に危険なことです。子どもたちで起きている問題もそうだと思います。

さっきのそのお話のなかにもう一度戻ってきますと、鳥取県立の三田さんのお話のなかで、地域の課題に関して、人々が寄ってくれて、その課題を出すという話がありました。これはとっても私は大切な、レジリエンスからいうと大切なところをいってるなと思いました。人々が寄ってくれて、そして自分たちの記憶、地域の記憶を確かめて、そして時代が違うから同じ街はできないかもしれないけど、新たな街をつくる。あるいは、昔あった災害を記憶として残しておく。「だからここには、家建てちゃいけないんだよ」とかというようなことをちゃんとアーカイブするとか、図書館に置いておくというような意味合いもあるし、もう一つは、私は、人々のつながりという意味で、ソーシャルキャピタルみたいなものが、育つのだろうなあと考えています。ですから、この鳥取県立の事例を伺って、ああ、なるほど、鳥取県立はこういう形でその地域を支えてるんだなと思いました。そこでですね、三田さんには少し、もう少し地域を支えるためになにか他にもやってらっしゃることがあると思うんで、その事例を少しあったら教えていただけませんか。

(三田)

すべていろんな取り組みについて、最初にも申しましたけど、ミッションっていうなかで、私たちがいろいろ考えて行動をしているっていうことを思うと、いろんな活動が、確かに、「地域ではどうか」っていうところを地域の課題をなんとかして解決したいっていう思いで、取り組んでいるっていうのはそうなんですね。それは、ビジネスもそうです、医療・健康もそうなんですけど。最後に紹介した事例っていうのは、実はそれは図書館主体で動いてるものではないです。これってもしかしてちょっと、小田垣さんおっしゃってたところにも、もしかしてつながるのかな、なんて思って少し聞いてたんですけど。図書館のなかだけにいても、ちょっとそこでジタバタしていてもなかなか寄ってくれない人たちがいてそこで、他のどこかとつながって、今回は大学の事例を出しましたけど、そういうところとつながることで、本当に、来たことのない子たちがいっぱい図書館には来てくれました。で、そのときに一応聞くんですね。「利用者カード持ってますか。また本借りれるけど、どう」なんていうと、もう8割くらい持っていないと。「あ、こういう子たちが来てくれたんだな」っていうのが、かえって嬉しかったりしています。

だから、地域とつながるっていうことっていうのは、一つは図書館でなにか企画しようと思っても難しいんですけど、そういう地域のなにか団体とかとつながってゆくっていうことで、さっきみたいな活動が実現できるのかなと思います。これがその答えになっているかはわかりませんが、今年、県立図書館で30周年の記念の年を迎えました。このコロナの年だったんですけども。一応リモートでのイベントを開催したり、集まれる人だけは集まるっていうようなことをやったんですけど、そのなかで、図書館の近くというか、図書館を出たところに中庭のようなどころがありまして、そこで一箱古本市っていうのをやりました。それは図書館のなかで実行委員会をつくって、それで地域の人たちが、ダンボール一箱の本を売ったりして、するイベントなんですけれども、そういうイベントをちょっとやってみたりしました。これが地域の課題を解決するということではないのかもしれませんが、そういう人とのつながりをつくる、また新たな視点でつながりをつくってゆくとか、交流をつくってゆくっていうことを少しずつ始めているというところなんです。私たちがいまその「まちづくり」とか、地域の課題を解決するために、なにか図書館と一緒にできないかなっていうのを模索しながらやっているところっていうことなので、これからそういう事例がもっとどんどん話せたらいいなと思いますが、いまのところは模索中です。

(永田)

ありがとうございます。あと、なんというのかな、若い世代と古い世代、世代間のつながりみたいのはありますか。

(三田)

世代間ですか。

(永田)

人生の先輩が、若い人に伝えるようなサービスってありますか。

(三田)

そうですね、その具体的にそういうところを意図したものではなかったんですけど、図書館

主体ではなくコラボレーションさせてもらった企画のなかに、地域の家庭で眠っている8ミリフィルムを集めて、その映像を残そうということを事業としていらっしゃる団体があったんですね。その方々が図書館に来られて、図書館と一緒になにかできないかなという相談がありました。うちとしては非常におもしろい企画だと思いましたので、ちょっと一緒にやりましょうということで、コラボさせていただいて、そのときなにをしたかっていうと、その団体の方々は、その8ミリフィルムのデータを映像化して、DVDとかで流して、流すということができるっていうことだったので、じゃ公開鑑賞会をやってみましょうということで、本当にただの8ミリフィルム、家庭のビデオなので、映像なので、淡々とした映像が流れるんですけど、そのなかに、街の様子が映っていたりとか、あともういまはないような百貨店が映っていたりとか、そういうものが残っているわけですね。だいたい昭和30年代、40年代とか、その辺りのものなんですけれども、当時を知る人たちは見に来られます。でもそのなかに若い子たちも来られていて、その映像をみながら、その当時を知っている人たちは、そのときの様子を語られるんですね。で、その話を聞きながら、そのまた若い子たちはそれで、感じたことだったり、そうだったんだなってような感想を述べたりして、そういう場面をですね、一つの企画のなかで、体験しました。そのときには図書館でしていただくので、当時の様子がわかる写真を出してみたりだとか、本を出してみたりということも合わせてやりましたけれども。で、一つおもしろかったのは、そういう場面でいろんな情報交換ができたなあということも一つあったんですが、実はそのイベント告知するために、館内ですべて映像を流し続けたんですね。展示コーナーみたいなものをつくって。懐かしいブラウン管テレビを持って来てくださって、そこではずっと映像が流れていて、そこで立ち止まってみる方もあって、「立ち止まってみられるなら、もしかしたら感想を書いてもらえるかもしれない」っていうことで、感想を書くノートを置いたんですね。そしたら思いがけずいっぱい書いてくださったりして。そういうふうに、あの、思いがけない、図書館の資料ではなかった部分ですね、その映像なので。ここから生まれてくる、それこそ世代間の交流というか、交流ですらないことかもしれませんが。というようなことが実際はありました。すごくおもしろい体験でした。

(永田)

まさに図書館があるからできることだと思うんですね。それをね、記憶を残して、個々に記憶を残して、必ずしも図書館が所有しなくても構わないわけで、図書館という場を通じてみんなで共有できれば、そこになにかイメージのコミュニティというものができてくると思うんですね。そういうコミュニティが異常な事態に関して、それなりの対応ができるというような気もします。そんな意味で、ぜひそういった活動を、鳥取県立図書館さんだけでなく、どこでもやっていただきたいような気がします。

もう一つちょっと印象的な話なんですけど、名取さんのほうでは、「図書館の絆まつり」っていうのが一つのきっかけだったとおっしゃってました。それから、鳥取県立では「なんとか大賞」、なんでしたっけ。

(三田)

「夢を実現しました」です。

(永田)

「夢を実現しました大賞」。なんかどちらも、ちょっと非日常的な感じなんですけども、その後の図書館の動きをプッシュするというか、機動力になってますね。絆のほうは、なんかこう、「できてしまった」ということなんでしょうかね。「夢を実現しました大賞」、最初聞いたときは「なんだこれは？」と思ったんですけどね。なにがあったんですか。

(三田)

「夢を実現しました」大賞ですか。ビジネス支援をはじめたときに、公共図書館で質問をしてちゃんと答えてくれるんだろうとか、役に立つんだろうかっていうのが利用者の方、県民の方にもなかなかわかりにくいんじゃないかなっていうのはありました。私たちもぜひ、どう活用されて、図書館を使っただいて、得られた情報っていうのが、本当に役に立ったんだろうかって知りたいなっていうところからスタートしているっていうところなんです。図書館の機能っていうのは、本を読まれるとかそれだけじゃなくて、いまは図書館を場所としていろんな活動が展開されています。相談会もあれば、セミナーを開催したりとか、いろんな情報を得られるなかで、そういったものを使って、なにかヒントを得られて、それが開業だとか、経営改善でも構いません。なにかに役に立ったというところを寄せていただけないかなということで募集をして、そしてそのなかから優秀な作品と判断したものについて表彰を行っています。受賞者の方のそれぞれのストーリーは漫画にさせていただいています。

(永田)

堅苦しい話をしますとですね、図書館の活動の成果評価っていうあり方があります。成果評価はとても難しいです。でも簡単にあの「夢を実現しました大賞」は、とても明確な成果評価だなと思いました。実は、まともな成果評価っていうのはほとんどないですが、あれは成果評価ですね。

ということで、この二つの事例を今日はお話しいただいたんですが、二つの事例にはかなりいろんなレジリエンスを支えるアイデア、そして実際の活動があったように思います。例年のように質問でもって議論が終わってしまうということは今年はありませんで、私どももお話しをすることができました。皆さん、難しそう顔をしてる人もいますし、ニコニコしてる人もいますが、最後になにかこれだけは、いっておきたいっていうのはありますか。

(太田)

すいません1個質問。これってあの、夢をかなえましたっていう、夢をかなえた図書館は県立図書館だけなんですか、県下の市町村の図書館で、こんな夢をかなえたっていうのでも応募できるんですかね。

(三田)

はい、県内の市町村の図書館であれば大丈夫です。実際に、受賞者のなかにも県内の図書館を使った事例というのが入ってます。

(太田)

あの鳥取県立さんが、県内の学校図書館さんに児童書全買いして公開して見計らいみたいな、やってますよね。あれはすばらしいなと思っていて。さっきのお話で、これからやっぱり市町村の図書館すごく大変だと思うんで、県立さんが、そうやってこう、いままで培ったノウ

ハウをぜひぜひ市町村におろして、鳥取県内の図書館全部が生き残ってゆけるように支援していただけるといいなと思います。

(永田)

はい。都道府県立図書館が市町村立図書館とは違うんだよっていう典型を示しているのは、鳥取県立さんがですね、本当に頑張っていると思います。

他になにかございますか。

最後に柴崎さんに一つ、ご感想でも述べていただくとよろしいかと思うんですが。

(柴崎)

はい、先ほど図書館の生き残りという話が出ましたけども、私もあの新しい図書館をつくってゆく過程で、危機感っていうほどの大げさなものではないのですが、ちょっと引かかるものがある。実は名取市は、仙台市の南側で、反対側の北側に多賀城市さんがあるんですね。私たちが準備しているときに、多賀城市さんが指定管理ですばらしい図書館をオープンさせました。で、うちの議員さんたちも、ああいう図書館が欲しいと言い出したらどうしようかなって。指定管理の図書館をすべて否定するわけではありませんが、名取にはちょっと合わないんじゃないかなっていう思いがあったので、そのためにはどうしたらいいのかっていうことを考えたときに、やっぱり地域を巻き込む、市民を巻き込んで一緒に図書館をつくってゆけば、それが図書館の生き残りにつながるんじゃないかと、そう思いました。友の会設立という方向に、図書館のほうで舵を取っていまに至っている、そのことを一言付け加えたいと思いました。

(永田)

おっしゃるとおりです。ありがとうございます。今回のテーマはレジリエンスということではありますが、図書館のサステナビリティという観点も視野にあります。だから図書館をどういうふうに支えてゆくか、また図書館は、図書館のためにあるというよりも、地域のためにあるわけですから、地域をどう支えてゆくかを引き続き考えてゆきたいと思います。

時間を過ぎてしまったようですので、このあたりで締めさせていただきます。本日は皆さまありがとうございます。皆さん、柴崎さん、三田さんに、御礼の意味を込めて拍手をお願いします。それでは失礼いたします。どうもありがとうございました。